

連日、テレビや新聞で報じられるウクライナ情勢から目が離せない。惨（おご）く破壊された街の様子や、あまりにも多くの人々が嘆き苦しむ様に触れると、自分の感情を言い表す言葉が見つからない。

戦争が、これ程自分の身近に感じた記憶は遙か彼方にある。

私が小学生になる前、大阪北区の梅田周辺を家族で訪れることがよくあった。当時の国鉄大阪駅周辺は、今では想像もできないほど、戦争の傷跡が至る所にあったように思う。例えば、現在駅前ビルがある地域にかつて建っていた住居の様子や、\*傷痍軍人の方があちこちで座られていた姿を目にして、まだ「戦後」が幼い私にはすぐ側に感じられた。

【\* 傷痍（しょうい）軍人： 戦闘その他の公務のために負傷した軍人，あるいは軍属】

私の父母は、第二次世界大戦の終戦を旧満州で迎えた。

母が亡くなった8年前、満州から日本への帰国途上の様子を、伯父が葬儀後に話してくれた。私が幼い頃にも何度か耳にしていた母についての話は、昔の大変さが身にしみるものだった。

帰国途上に足の指が凍傷により欠損したこと。その様子（健康体でない）を隠し通すために、本土へ向かう途中では随分と無理をとおしたこと。日本に戻ってからも、当時の多くの子どもたちがそうであったように、小学校にすら十分に通えなかったこと。全ては、日本の「戦後」へ向かう中で、母が経験した辛さだったと思う。

戦争はダメだ。

その言葉の重みをひしひしと現実感を持って感じる今は、危険な時代だと思う。出口が見えないこの危険な時代の中で、自身の無力さに心塞（ふさ）がれている人は、きっと沢山いるだろう。一体全体ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を、どうすれば止めることができるのだろうか、と。

人間は間違いや愚かな行動をすることもあられるけれど、心動かす素晴らしい行いもする。きっと、私たち一人一人の思いや声が伝わり、愚行を繰り返さない英知を生み出し、明るい未来が訪れるようできるのも、人間だと信じたい。「もう絶対戦争は嫌や」と言っていた母を思い、心の底からそう願う。

もしも母が生きていたら、今のウクライナの様子を見てなんと言うだろうと、母の誕生日である5月に思った。